

## 令和の天皇・皇后の「歌会始」和歌

(京都宮廷文化研究所特別顧問) 所 功

毎年正月中旬に開催されている宮中「歌会始」では、約一五〇年前の明治七年(一八七四)から、天皇・皇族や特別な宮廷歌人だけでなく、一般国民からの詠進も認められました。その際、入選作まで含めて、平安以来の朗唱方式により披露されています。

そのうち、昭和二十二年(一九四七)から今年までの御製と成年皇族の御歌および一般国民の詠進入選作は、宮内庁のホームページに掲載されています。それを通覧しますと、天皇の定められた「御題」(勅題)に応じて、各々に和歌を詠むという君民一体の雅な宮廷文化を知ることができます。とりわけ天皇陛下と皇后陛下の御製・御歌は、その時々の御心を窺う手がかりとしても貴重な資料とみられます。

そこで、ここには今上陛下と令和の天皇が成年以来、また皇后陛下も平成の皇太子妃となられて以来、「歌会始」で公表された和歌(御製・御歌)を抄出して、当代の両陛下を理解する一助とします。

凡 例 一 掲出の和歌(御製・御歌)は、末尾の参考文献③から引用した。

- 一 年次の( )内の年齢は、「歌会始」開催時の満年齢である。
- 一 和歌の( )内に読み仮名や語釈を補い、※に若干の説明を加えた。

### 一 皇孫徳仁親王(在学中)の御歌

1 昭和五十六年(一九八一)歌会始(20歳) 御題「音」

・懸緒(かけを) 断つ音高らかに響きたり 二十歳(はたち)の門出我が前にあり

※前年二月二十三日に宮殿の正殿(春秋の間)で成年式「加冠の儀」が行われた。

2 昭和五十七年(一九八二)歌会始(21歳) 御題「橋」

・鼻栗(はなぐり)の瀬戸(愛媛県今治市)にかかりし橋望み 潮乗りこえし舟人偲ぶ

※前年、学習院大学文学部で卒業論文のテーマとして「瀬戸内海水運史の研究」に専念された。

3 昭和五十八年(一九八三)歌会始(22歳) 御題「島」

・雲間よりしこのめ(明け方)の光さしくれば 瀬戸の島々浮き出でにけり

※前年四月、学習院の大学院へ進み、同テーマの研究を継続されていた。

4 昭和五十九年(一九八四)歌会始(23歳) 御題「緑」

・みはるかす牧場の緑冬萌(も)えて 遠く聞え来チャペルの鐘(かね)は

※前年十月からUK(英国) オックスフォード大学に留学し、「テムズ川の水運史」を二年間研究された。

5 昭和六十年(一九八五)歌会始(24歳) 御題「旅」

・フランスの旅路に眺(なが)むるアルプスに 故郷(ふるさと)の山なつかしく思ふ

※UK留学中、ヨーロッパ各地を巡歴し、アルプスも眺められた。

6 昭和六十一年（一九八六）歌会始（25歳）御題「水」

・オール手に艇（てい）競（きそ）ひ行く若人の 影ゆれ映るテムズの水に

※前年四月、テムズ川の牛津と劍橋の両大学対抗ボートレースを見学された。

7 昭和六十二年（一九八七）歌会始（26歳）御題「木」

・すこやかに伸びゆきてあれ子供らと 桜の若木植まつ願ふ

※前年春、昭和天皇の御即位六十記念として、皇居と周辺に桜の若木を植えられた。

8 昭和六十三年（一九八八）歌会始（27歳）御題「車」

・お木曳（きひき）の車の音色（ねいろ）高らかに 響きわたりぬ初夏の伊勢路に

※前年五月、伊勢神宮の式年遷宮（六年後）に向けて、御用材の「お木曳」行事に参加された。

## 二 皇太子徳仁親王（結婚前）の御歌

☆昭和六十四年（平成元年）一月七日の天皇崩御により「歌会始」は中止された。

9 平成二年（一九九〇）昭和天皇を偲ぶ歌会（29歳）御題「晴」

・朝もやの晴れ上がりゆく湖に ヒマラヤの峰 姿耀（かがや）ふ

※昭和六十二年（一九八七）三月、ネパール訪問中にヒマラヤの高峰を御覧になった。

10 平成三年（一九九一）歌会始（31歳）御題「森」

・五箇山（ごかやま）をおとづれし日の夕餉（ゆふげ）時 森に響かふこきりこの唄

※九年前の昭和五十八年（一九八三）七月、学習院大学地理研究会で夏季研修に五箇山を訪ね合掌造を見学された。

11 平成四年（一九九二）歌会始（32歳）御題「風」

・いにしへの歴史しのびつつ島訪ひぬ 松が枝を揺る瀬戸内の風

※前年二月、皇太子「立太子の礼」を行い、伊勢神宮などに参拝された。

12 平成五年（一九九三）歌会始（33歳）御題「空」

・大空に舞ひ立つ鶴の群眺（なが）む 幼な日よりのわが夢かなふ

※前年三月、皇太子、学習院大学史料館の客員研究員とられた。

## 三 皇太子・同妃（御成婚後）の御歌

※平成五年（一九九三）六月九日、小和田雅子嬢との「結婚の儀」が行われた。

13 平成六年（一九九四）歌会始（皇太子34歳・同妃30歳）御題「波」

・我が妻と旅の宿より眺むれば さざなみはたつ近江の湖（うみ）に「皇太子」

・君と見る波しづかなる琵琶の湖(うみ) さやけき月は水面(みのも) おし照る〔同妃〕  
※前年八月「全国農業青年交換大会」に滋賀県を訪ね、琵琶湖のみえる彦根で宿泊された。

14 平成七年(一九九五) 歌会始〔皇太子35歳・同妃31歳〕御題「歌」  
・人々をへだてし壁はくづれたり ベルリンに響く歓びの歌〔皇太子〕  
・夕映えの沙漠の町にひびきくる 祈りの時をつぐる歌声〔同妃〕

※前年十月、両殿下はドイツ・フランス・スペインを歴訪され、六年前に崩壊したベルリンの壁も御覧になった。  
またサウジアラビアを訪ね、リヤド郊外で沙漠を歩かれた。

15 平成八年(一九九六) 歌会始〔皇太子36歳・同妃32歳〕御題「苗」  
・子供らと苗木植多つつ我祈る 健やかに育て子らも苗木も〔皇太子〕  
・もろ手もちてひたすら花の苗植うる 知恵おそき子らまなこかがやく〔同妃〕

※前年十月一日、皇太子・同妃は滋賀県で開催の全国育樹祭に行啓された。

16 平成九年(一九九七) 歌会始〔皇太子37歳・同妃33歳〕御題「姿」  
・人みなは姿ちがへどひたごころ 戦(いくさ) なき世をこひねがふなり〔皇太子〕  
・大地震(おほなみ)のかなしみ耐へて立ちなほり はげむ人らの姿あかるし〔同妃〕

※前年八月、終戦五十年にあたり、ご両親の天皇(61歳)と皇后(60歳)は、広島・長崎・沖縄を訪ねられた。  
※両殿下は前々年一月十七日の「阪神淡路大震災」の被災地を、二月二十六日と三月五日に慰問された。

17 平成十年(一九九八) 歌会始〔皇太子38歳・同妃34歳〕御題「道」

・一本の杭に記されし道の名に 我学問の道ははじまる〔皇太子〕  
・ルワンダへ長くつらなる土の道 あゆむ人らに幸多くあれ〔同妃〕

※幼少期に東宮御所の庭で「奥州街道」の杭を見つけたことが一因で、陸路・水路の歴史研究に進まれた。  
※アフリカのルワンダ紛争は一九九〇年から数年断続していた。

18 平成十一年(一九九九) 歌会始〔皇太子39歳・同妃35歳〕御題「青」

・登山電車にゆられて登るユングフラウ 青き氷河はせまりくるなり〔皇太子〕  
・摩文仁なる礎(いしじ)の丘に見はるかす 空よりあをくなぎわたる海〔同妃〕

※皇太子は英国留学中、アルプスのユングフラウで氷河を御覧になった。

なお、平成二十六年六月「日本・スイス国交一五〇年記念」に名誉総裁として再訪された。  
※前年五月、沖縄の本土復帰二十五年に、両殿下は摩文仁の丘「平和の礎」で慰霊された。

19 平成十二年(二〇〇〇) 歌会始〔皇太子40歳・同妃36歳〕御題「時」

・はるかなる時空を越えて今見ゆる 星の世界をすばるは探る〔皇太子〕  
・七年(ななとせ)をみちびきたまふ我が君と 語らひの時重ねつつ来ぬ〔同妃〕

※前年一月、国立天文台ハワイ測候所で口径8・2mの「スバル望遠鏡」を建設して試験観測を始めた。

- 20 平成十三年（二〇〇一）歌会始〔皇太子41歳・同妃37歳〕御題「草」  
・草原をたてがみなびかせひた走る アラブの馬は海越えて来ぬ〔皇太子〕  
・君とゆく那須の花野にあたらしき 秋草の名を知りてうれしき〔同妃〕  
※七年前（一九九四年）皇太子・同妃がオマーン王国を訪問の際、アラブ種の牝馬を贈られ、三年後（一九九七年）に仔馬「豊敏」が産まれている。

#### 四 皇太子・同妃（敬宮愛子内親王誕生後）の御歌

- 21 平成十四年（二〇〇二）歌会始〔皇太子42歳・同妃38歳〕御題「春」  
・青春をわが過ごしたる学び舎に 新入生の声ひびくなり〔皇太子〕  
・生（あ）れいでしみどり児のいのちかがやきて 君と迎ふる春すがすがし〔同妃〕  
※前年四月、皇太子は学習院初等科の校舎を訪ねられた。  
※前年十二月一日、敬宮（としのみや）愛子内親王が誕生された。

- 22 平成十五年（二〇〇三）歌会始〔皇太子43歳・同妃39歳〕御題「町」

- ・オックスフォードのわが学び舎に向かふ時 ゆふべの鐘は町にひびけり〔皇太子〕  
・いちやう並木あゆみてであふ町びとに みどり児は顔多みてこたふる〔同妃〕  
※二十年程前、オックスフォード大学のイートン校に留学されていた。  
※前年十二月、愛子内親王満一歳。東宮御所の近くを散歩して町の人々に会われた。

- 23 平成十六年（二〇〇四）歌会始〔皇太子44歳・同妃40歳〕御題「幸」  
・すこやかに育つ幼なを抱きつつ 幸おほかれとわが祈るなり〔皇太子〕  
・寝入る前かたらひすこすひと時の 吾子の笑顔は幸せに満つ〔同妃〕  
※前年十二月、愛子内親王健かに満二歳とられた。

- 24 平成十七年（二〇〇五）歌会始〔皇太子45歳・同妃41歳〕御題「歩み」  
・頂きにたどる尾根道ふりかへり わがかさね来し歩み思へり〔皇太子〕  
・紅葉ふかき園生（そのふ）の道を親子三人 なごみ歩めば心癒えゆく〔同妃〕  
※皇太子は結婚後も山登りを続行され、また同妃は赤坂御用地を親子三人で散策されている。

- 25 平成十八年（二〇〇六）歌会始〔皇太子46歳・同妃42歳〕御題「笑み」  
・いとけなき吾子の笑（え）まひにいやされつ 子らの安けき世をねがふなり〔皇太子〕  
・輪の中のひとり笑へばまたひとり 幼なの笑ひひろがりてゆく〔同妃〕  
※前年十二月、愛子内親王満四歳となられ、同年代のお子たちとの集まりにも出られるようになった。

#### 五 皇太子・同妃（甥悠仁親王誕生後）の御歌

※前年九月六日、秋篠宮（40歳）・紀子妃（39歳）に長男悠仁親王が誕生された。

- 26 平成十九年（二〇〇七）歌会始〔皇太子47歳・同妃43歳〕御題「月」

- ・降りそそぐ月の光に照らされて 雪の原野の木むら浮かびく〔皇太子〕
  - ・月見たしといふ幼な子の手をとりて 出でたる庭に月あかくさす〔同妃〕
- ※皇太子は前年冬、スキーに行かれた。また同妃は前年秋、東宮御所で親子三人お月見をされた。

- 27 平成二十年（二〇〇八）歌会始〔皇太子48歳・同妃44歳〕御題「火」
- ・蒼（あを）き水たたふる阿蘇の火口より 噴煙はのぼる身にひびきつつ〔皇太子〕
  - ・ともさる燭の火六つ願ひこめ 吹きて幼なの笑みひろがれり〔同妃〕
- ※前年秋、皇太子は熊本行啓の際に阿蘇山へ立ち寄られた。
- ※その十二月一日、愛子内親王満六歳のお誕生日祝いをされた。

- 28 平成二十一年（二〇〇九）歌会始〔皇太子49歳・同妃45歳〕御題「生」
- ・水もなきアラビアの砂漠に生え出でし 草花の生命（いのち）たくまじきかな〔皇太子〕
  - ・制服のあかきネクタイ胸にとめ 一年生に吾子はなりたり〔同妃〕
- ※皇太子・同妃は、平成六年（一九九四）十一月、サウジアラビアを訪ね沙漠を歩かれた。
- ※愛子内親王は前年四月、学習院初等科に入学された。

- 29 平成二十二年（二〇一〇）歌会始〔皇太子50歳・同妃46歳〕御題「光」
- ・雲の上（へ）に太陽の光はいできたり 富士の山はだ赤く照らせり〔皇太子〕
  - ・池の面（も）に立つさざ波は冬の日の 光をうけて明かくきらめく〔同妃〕

※皇太子は平成二十年夏、富士山に登られ、また同妃は毎朝、赤坂御用地内を散策されていた。

- 30 平成二十三年（二〇一一）歌会始〔皇太子51歳・同妃47歳〕御題「葉」
- ・紅葉（もみぢ）する深山（みやま）に入りてたはずめば 木々の葉ゆらす風の音（と）聞こゆ〔皇太子〕
  - ・吹く風に舞ふいちやうの葉秋の日を 表に裏に浴びてかがやく〔同妃〕
- ※皇太子は数年前の秋、東京近郊の山に登られた。また同妃は前年十一月、学習院初等科を訪ねられた。

- 31 平成二十四年（二〇一二）歌会始〔皇太子52歳・同妃48歳〕御題「岸」
- ・朝まだき十和田湖岸におりたてば はるかに黒き八甲田（はつかふだ）見ゆ〔皇太子〕
  - ・春あさき林あゆめば仁田沼の 岸辺に群れてみづばせう咲く〔同妃〕
- ※皇太子は学習院中等科三年生の修学旅行で、十和田湖から八甲田連峰を眺められた。
- ※同妃は前年三月の東日本大震災に心を痛められ、平成八年（一九九六）四月に皇太子と訪ねた福島県の磐梯朝日公園仁田沼散策の光景を詠まれた。

- 32 平成二十五年（二〇一三）歌会始〔皇太子53歳・同妃49歳〕御題「立」
- ・幾人の巣立てる子らを見守りし 大公孫樹（いちやう）の木は学び舎に立つ〔皇太子〕
  - ・十一年前吾子の生れたる師走の夜 立待ち月はあかく照りたり〔同妃〕
- ※皇太子は前年秋、学習院初等科で「大銀杏」を御覧になった。
- ※愛子内親王が誕生された平成十三年（二〇〇一）十二月一日は「立待ち月」（十六夜）であった。

33 平成二十六年（二〇一四）歌会始〔皇太子54歳・同妃50歳〕御題「静」

・御社（みやしろ）の静けき中に聞え来る 歌声ゆかし新嘗（にひなめ）の祭〔皇太子〕

・悲しみも包みこむごと釜石の 海は静かに水たたへたり〔同妃〕

※皇太子は毎年十一月二十三日夜半、天皇が神嘉殿で行われる新嘗祭に、西隔殿に侍座して神楽歌を聴かれる。

※両殿下は前年十一月、被災地の釜石を訪ね、復興途上のウニ漁を御覧になった。

34 平成二十七年（二〇一五）歌会始〔皇太子55歳・同妃51歳〕御題「本」

・山あひの紅葉深まる学び舎に 本読み聞かす声はさやけし〔皇太子〕

・恩師より贈られし本ひもとけば 若き学びの日々のなつかし〔同妃〕

※皇太子は前年十一月、第三十八回全国育樹祭に山形県へ行啓され、最上郡の金山小学校で地域ボランティアによる読み聞かせ（絵本「きつねのボタン」）を御覧になった。

※同妃はオックスフォードの大学院で勉学中に恩師から贈られた本を丹念に読まれていた。

35 平成二十八年（二〇一六）歌会始〔皇太子56歳・同妃52歳〕御題「人」

・スペインの小さき町に響きたる 人々の唱ふ復興の歌〔皇太子〕

・ふるさとの復興願ひて語りあふ 若人たちのまなざしは澄む〔同妃〕

※皇太子は平成二十五年（二〇一三）六月、スペインを訪ね、ビセンテ・ネリア小学校の生徒による東日本大震災の復興歌「花は咲く」合唱を聴かれた。

※両殿下は前年十月、福島県の震災地を再訪し、県立ふたば未来学園高校で生徒たちと会話された。

36 平成二十九年（二〇一七）歌会始〔皇太子57歳・同妃53歳〕御題「野」

・岩かげにしたり落つる山の水 大河となりて野を流れゆく〔皇太子〕

・那須の野を親子三人（みたり）で歩みつ 吾子（あこ）に教（をし）ふる秋の花の名〔同妃〕

※皇太子は平成二十年（二〇〇八）五月、山梨県の笠取山へ登り、東京都水道水源林を視察された。

※両殿下は前年夏、中学三年生の愛子内親王と三人で那須御用邸あたりを散策された。

37 平成三十年（二〇一八）歌会始〔皇太子58歳・同妃54歳〕御題「語」

・復興の住宅に移りし人々の 語るを聞きつつ幸を祈れり〔皇太子〕

・あたらしき住まひに入りて閑上（ゆりあげ）の 人ら語れる希望のうれし〔同妃〕

※両殿下は前年十一月、宮城県名取市の閑上地区復興住宅団地を訪ねて被災者をねぎらわれた。

38 平成三十一年（二〇一九）歌会始〔皇太子59歳・同妃55歳〕御題「光」

・雲間よりさしたる光に導かれ われ登りゆく金峰（きんぶ）の峰に〔皇太子〕

・大君と母宮の愛（め）でし御園生（みそのぶ）の 白樺（しらかば）冴（さ）ゆる朝の光に〔同妃〕

※皇太子は学習院高校一年生の昭和五十年（一九七五）七月、山梨と長野の県境にある金峰山に登られた。

※同妃は平成の天皇・皇后が昭和三十四年（一九五九）以来お住まいの東宮御所で大切に育てられた白樺の木々に寄せて感謝の気持ちをこめられた。

## 六 天皇の御製と皇后の御歌（即位後）

※平成三十一年の四月三十日、天皇（85歳）は「退位」（讓位）して「上皇」となられ、五月一日に皇太子（59歳）が踐祚して新元号「令和」の天皇となり、十月二十二日、即位の礼を挙げられた。

39 令和二年（二〇二〇）歌会始〔天皇60歳・皇后56歳〕御題「望」

・学舎（まなびや）にひびかふ子らの弾（はず）む声 さやけくあれとひたすら望む〔天皇〕  
・災ひより立ち上がらむとする人に 若きらの力希望もたらす〔皇后〕

※両陛下は前年六月、都内の麻布保育園を訪れ、また十月、愛子内親王が在学中の学習院女子中・高等科へ出向かれ文化祭を御覧になった。

※その十二月、秋に台風十九号で被災した宮城県丸森町と福島県本宮市を見舞い、若いボランティアを励まされた。

40 令和三年（二〇二一）歌会始〔天皇61歳・皇后57歳〕御題「実」

・人々の願ひと努力が実を結び 平らけき世の到るを祈る〔天皇〕  
・感染の収まりゆくをひた願ひ 出で立つ園に梅の実あをし〔皇后〕

※両陛下は前年早々から新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により困難に直面している人々に心を寄せておられた。

41 令和四年（二〇二二）歌会始〔天皇62歳・皇后58歳〕御題「窓」

・世界との往き来難（がた）かる世はつづき 窓開く日を偏（ひとへ）に願ふ〔天皇〕

・新しき住まひとなるる吹上の 窓から望む大樹のみどり〔皇后〕

※天皇は新型コロナウイルス感染の収束を直視し今後を展望されている。

※前年九月、天皇・皇后は成人間近の愛子内親王と共に、赤坂から皇居吹上の新御所へ移居された。

42 令和五年（二〇二三）歌会始〔天皇63歳・皇后59歳〕御題「友」

・コロナ禍に友と楽器を奏でうる 喜び語る生徒らの笑み〔天皇〕  
・皇室に君と歩みし半生を 見守りくれし親しき友ら〔皇后〕

※天皇は前々年（二〇二二）の十月、和歌山県で開催された第三十六回国民文化祭にオンラインで参加され、新型コロナウイルス渦中でも吹奏楽の生徒たちが練習に苦心した話を聴かれた。

※皇后は三十歳近くで皇室に入られてから三十年近い歩みを温く見守ってくれた人々に感謝しておられる。

## 七 天皇の決定される「御題」の意味

以上、浩宮徳仁親王が、①満二十歳で成年となられた翌年正月から十二回、また②小和田雅子嬢と結婚された翌年正月から二十六回、さらに③天皇として即位された翌年正月から四回、「歌会始」において披講された和歌（御歌・御製）を抄録しました。

そのうち、大半（約四分の三）を占めるのは、結婚された雅子妃Ⅱ皇后との三十年ですが、それは平坦な道程ではありませんでした。しかし、どんな時も助けあい励ましあい、特に愛子内親王が成長されるにつれて、三人で支えあいながら、困難を乗り越えて来られたことが、抄録した御歌・御製からも伝わって参ります。

「ちなみに、一昨年（令和三年）十二月一日に「成年」（満二十歳）となられた愛子内親王は、昨年と今年の歌会始

に次のような御歌を出されています。

・〔令和四年〕 英国の学び舎に立つ時迎へ 開かれそむる世界への窓

※これは平成三十年（二〇一八）、学習院女子高等科二年生の夏休みに、イギリスのイートン校（全寮制）へ語学研修・史蹟見学に行つて来られ時の感慨です。

・〔令和五年〕 もみぢ葉の散り敷く道を歩みきて 浮かぶ横顔友との家路

※これは前年秋、皇居吹上御所の庭を散策されながら、新型コロナウイルス禍の前に友人と学校への帰り道を語り歩いたことを思い出して詠まれたものである。

皇室の方々（宮内庁の関係有志も）、毎年正月の「歌会始」だけでなく、毎月の「月次（つきなみ）歌会」にも「御題」を詠み込んだ和歌を作られます。その御題はどのように選び定められるのでしょうか。この点について、昨年の歌会始後に、歌会選者で宮内庁御用掛の篠弘氏（一九三三〜二〇二二年十二月、89歳）は、『AERA』N記者の取材に次のごとく答えています。

すなわち、まず「歌会始の五人の選者が過去のお題を参考にして二つにしぼり、その上で「最終的に決定するのは、天皇の役目」です。たとえば、令和四年の歌会始に向けての御題「窓」は、同二年十二月までに選定され、翌三年正月の歌会始終了時に公表されました。ついで同年九月末日までに一般から詠進された作品は、宮内庁式部職の担当者と選者により入選十首と佳作十首が選ばれたのです。

この御題「窓」について詠まれた天皇の御製（前掲41）は、篠弘氏によれば「コロナ禍が収束したその先に、いま大きく落ち込んでいる世界の人々との往来が、再び盛んになる日の訪れを願つて詠まれた和歌」です。しかも「天皇に即位してからは、歌を締めくくる用語として『望む』『祈る』『願う』など、人びとと共にある言葉をお選びにな

っています」と説明しておられます。

こうして選定され今年正月に公表された新しい御題は「和」です。この一文字（訓読でも熟語でもよい）を詠み込んだ作品を半紙に毛筆で清書し、九月末日までに〒一〇〇一八一一宮内庁「詠進係」へ送ること（詳細㊟参照）、それをぜひより多くの人々に実行して頂けたらと念じております。念のため、「御題」に寄せて詠進すること自体に意味があり、入選しなくても、詠進歌のすべてが両陛下のもとへ差し上げられ、それを一々御覧くださるといわれています。

なお、本稿の入力には、野木邦夫氏（日本学協会研究員）の協力をえました。ちなみに、平成の天皇も今上陛下も、ワープロ・パソコンを使って歌稿の推敲をしておられる、と伝えられています。

かんせい P L A Z A（令和五年八月一日）

#### 〈参考文献〉

- ①西宮一民氏編『新年御歌会始歌集』辛亥増補版（保育社、昭和四十六年）
- ②菊葉文化会編『宮中歌会始』（毎日新聞社、平成七年）
- ③宮内庁編『宮中歌会始全歌集』（東京書籍、同三十一年）
- ④宮内庁ホームページ「歌会始」（「詠進要領」「お題一覧」など）